

子どもたちの 学力向上を めざして



はじめに

本市の「学校教育の重点」では、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和のとれた子どもの育成を、学校教育の基本指針として挙げています。本書では、全ての教職員、とりわけ若手の先生方に向けて、3つの基本指針のうち、特に『「確かな学力」の育成に向けて』に焦点を当て、これまでの全国学力・学習状況調査や本市独自の小中一貫学習支援プログラム(プレジョイントプログラム、ジョイントプログラム及び学習確認プログラム)等の分析結果からも明らかになってきている、子どもたちの学力向上に資するポイントや取組等を紹介しています。

子どもたちに「確かな学力」を育成するためには、さまざまな調査結果を活用し、しっかりとした分析・評価を行いながら、学校内でのしっかりとした共通理解と連携はもちろん、児童・生徒一人一人のキャリア発達を見据え、ねらいを明確にした、小中一貫した取組を行うことが重要です。

本冊子が「学校教育の重点」と合わせて、日々の指導の充実や授業研究を進めるにあたっての有効な教材として、教職員一人一人のスキルアップと子どもたちの学力向上の一助となることを願います。

もくじ

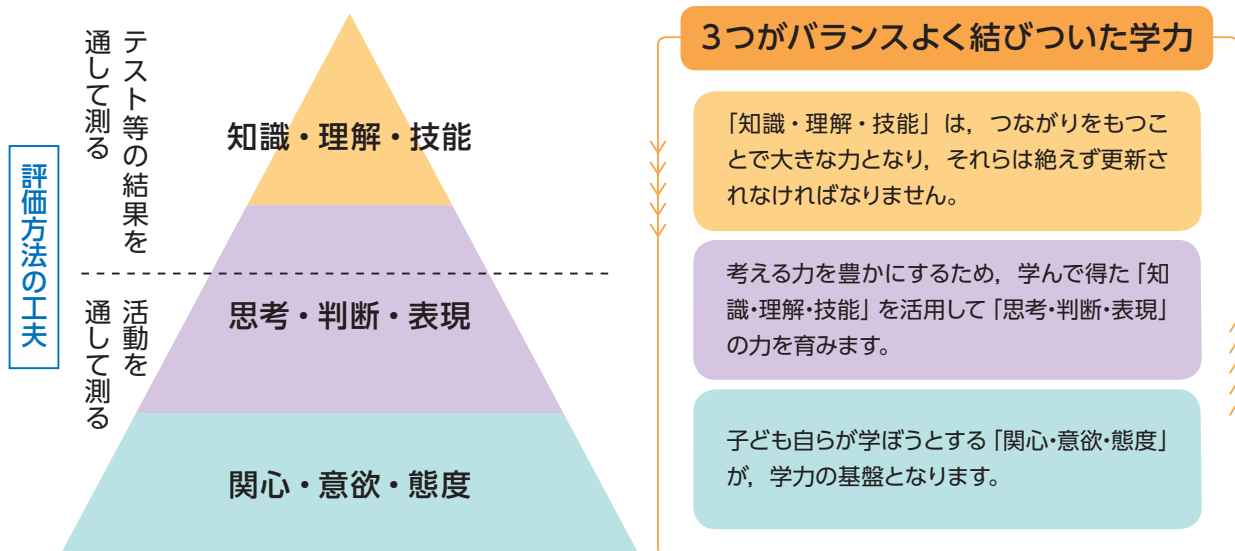
- 子どもたちに確かな学力を培うために 1
- 子どもたちに確かな学力を培うために ～小学校編～ 2
中学校の先生も一読しよう!
- 子どもたちに確かな学力を培うために ～中学校編～ 7
小学校の先生も一読しよう!
- 小中一貫教育と学力向上 11
- 言語活動の充実を目指して 12
 - 例① ポスター発表を通して調べ学習から探究活動へ
 - 例② 学校図書館を活用して

子どもたちに確かな学力を培うために

『確かな学力』

子どもが、基礎的・基本的な知識・技能はもとより、「習得した知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」、さらには、「学ぼうとする意欲(学ぶ喜び・目的意識・課題意識・将来展望等)」、「生涯にわたって学び続ける力(学び方を身に付ける・問題解決能力・自己教育力等)」等を身に付けること。

「確かな学力」を培うためには、子どもが学ぼうとする「関心・意欲・態度」を基盤にして、そこに「知識・理解・技能」や「思考・判断・表現」がバランスよく結び付くことが大切です。つまり、これらが相互につながり、統一された学力こそが「確かな学力」になると言えます。これら三つの観点からは、テスト等の結果から定量的に測る力や、活動の中での子どもの姿から測る力を見出すことができ、評価する方法については工夫が必要になります。



研究授業の成果を 平常の授業に生かす

研究授業と平常の授業とがかい離していませんか。

研究発表会や参観日の授業だけではなく、日常の授業から、一人一人の子どもの状況を把握した、意図的な働きかけのある授業を丁寧に積み重ねることが重要です。

学力向上の鍵は 「授業づくり」にある

テストの結果が思わしくないからといって、ただ、くり返しの練習をさせればよい訳ではありません。学力向上のためには、発達段階に即して、子どもが主体的に学ぶ授業をつくっていくことが何よりも大切です。

目的・徹底・検証

今、実践されている学力向上の取組を「目的・徹底・検証」をキーワードにして確かめます。「子どもにどんな力をつけようとしているか」「取組は徹底しているか」「成果は上がっているか」を明らかにしましょう。

「授業づくり」をはじめとする、さまざまな学力向上の取組をふり返ってみましょう。



小学校編



授業指導ノート

- 発達段階に応じた「子どもたちが学び合う授業」をめざします。
- 子どもたちが相互にかかわり合いながら思考を深めていくための話し合い活動を組織します。

学び合いのある授業

授業をつくる

授業スタイルをつくる
話し合いをつくる
各教科等のすべての授業において

連動性

すべての取組が連動している。

系統性

系統的な取組になっている。

計画性

計画的な取組になっている。



全校体制で取り組む
学力向上



読書ノート

系統的な学習の継続

課外学習をつくる

読書習慣をつくる
基礎基本をつくる

帯時間・読書タイム・補習時間

- 帯時間を活用して、計画的で系統的な学習活動を続けます。
- 子どもにどんな力をつけるのかを明確にします。
- 子どもに分かりやすい「めあて」をもたせます。
- 確認テストなどを通して、学習の達成度を子ども自身が捉えるようにします。

子どもの主体的な学びをつくる



自ら進んで
学習する子ども



自主学习ノート

自主的な学習の継続

家庭学習をつくる

学習習慣をつくる
自主学习をつくる

宿題・自主学习・自由研究

- 子ども自らが学習する内容を選択して取り組む家庭学習をめざします。
- 問題解決的な学習の展開を意識した家庭学習をめざします。

中学校へのつながりを意識して取り組みましょう

授業

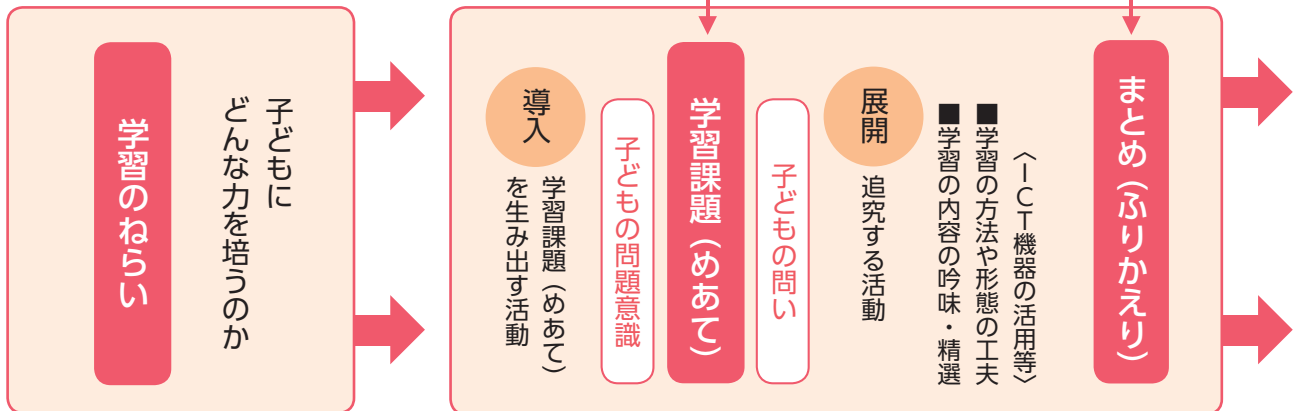
授業スタイルをつくる

- 「一方的に知識を注入するだけの授業」「ただ練習をくり返す一斉型の授業」を発達段階に応じて問い直しましょう。
- 教師が自分の経験だけに依存する「自己流の授業」を続けていては、授業力は向上しません。教科の特性をふまえ、学習内容を整理し、学習活動を工夫することで授業を変えましょう。

- 授業において、子どもたちが主体的に問題解決にあたる学習過程をつくります。
- 授業の入口に“学習課題（めあて）”を設定し、授業の出口には、それと対応する“まとめ（ふりかえり）”を位置付けます。

- このような「学習の方法」を工夫することと併せ、知識の習得や意味理解を図るための「学習の内容」を吟味・精選することで、「授業づくり」は確かなものとなります。

対応



- 授業の準備で京都市指導計画をもとに授業指導ノートをつくる

(※ P4 授業指導ノートを作成し、授業を構想しよう！ 参照)

- 45分間の授業で

学習課題（めあて）とまとめ（ふりかえり）を明確に対応させ、板書と児童のノートにつなげる

課外学習

- 取組が形骸化していませんか。
- 学校全体で組織的に取り組んでいますか。
- 教材の選択に指導者の共通理解がありますか。
- 学習に評価をしていますか。



- テストや校内での力だめしを実施するなどして、的確な評価をしましょう。
- ただ課題を与えるだけではなく、同時に子どもの意欲を高める働きかけをしましょう。
- 課外に行う調べ学習などでも、積極的に図書館の活用を図り、子どもたちが情報を収集し活用する力を高めることができるようにしましょう。

家庭学習

- 家庭（保護者）の協力を得るために、学校からの働きかけはありますか。
- 授業時間に終えられなかったことをそのまま宿題にしていますか。



- 家庭（保護者）の協力を得るための取組を進めましょう。
- 自ら設定した学習課題に取り組む「自学自習ノート」を子どもたちがつくれるように、学校での指導を工夫しましょう。

(※ P6 自主学习ノートで学びの意欲を高める 参照)

学習ノートの活用で学びの質を高める

学びの足跡を自分で確認できる学習ノートは、知識の定着だけでなく学び方を学ぶなど主体的に学ぶ力を育てる上でも重要なものです。

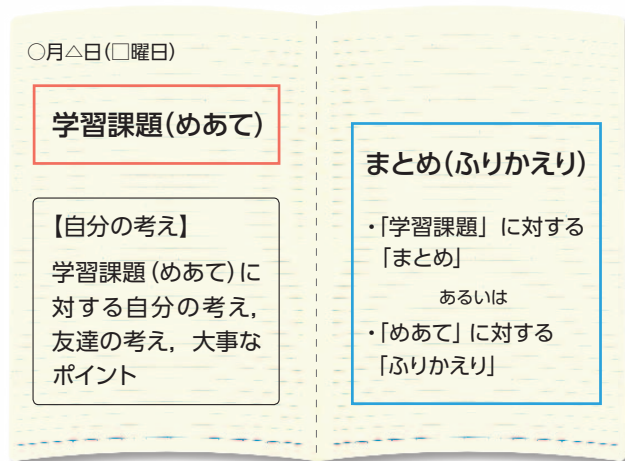
写し取る、解答や考えを書くなど学習展開上の部分的な記録から、学習課題(めあて)に対して課題解決までの道すじや考えを書き記したり分かりやすくまとめたりすることで、主体的に学習する態度や重要な事柄をまとめて表現する力等が身につきます。

発達段階に応じた学習ノートのつくり方や評価のポイントなどを、全教員で共通理解して全校で取り組むことが、子どもたちの学びの質と意欲の向上にもつながります。計画された板書を通して1時間の学びを児童の学習ノートに生かすようにしましょう。

● 児童の学習ノート

「学習課題(めあて)」と「まとめ(ふりかえり)」が明確に対応する児童のノートづくりを指導します。

標準例



● 学習の足跡を評価します

児童のノートを中心に、授業の評価と改善を行います。

① 評価のねらい

- ・児童の学習意欲を高め、主体的に学習する態度を育てます。
- ・調べたことをまとめる力、考えたことを表現する力を評価します。

② 評価方法(例)

- ・児童が、ノート作りで自信のある見開き2ページを担当や専科担当者などの評価者に見せます。
- ・事前に示された規準をもとに、評価者が評価を行います。

③ 評価規準(例)

基礎編

- ・日付を書く
- ・マスの中に文字を書く(横の罫線の間に字が書けている)
- ・落書きをしていない
- ・大事なところは赤で書いたり線を引いたりしている
- ・直線を定規で引く
- ・項目ごとに行をあけるなどして、見やすくしている

発展編

- ・自分の考えを書き加える
- ・矢印や図を効果的に使っている
… 前の部分の説明
→ だから 時間の経過
⇔ 関連している
- ・効果的に色分けされている
- ・学習したことを生かしながら、学習のまとめをしている





自主学習ノートで学びの意欲を高める

家庭学習のねらいは、家庭でも自ら学習する習慣を身に付けることにあります。まず、家庭における学習環境（学習する場所や学習用具などの状況）や子どものくらしの様子に配慮し、学習の内容と量を決めなければなりません。そして、学校の授業と連動して、家庭学習においても、教師から課題を与えられるだけの受け身の学びではなくて、自らが課題を選ぶ主体的な学びをつくりたいものです。

自主学習ノートで家庭学習を積み上げ、小さな成功体験を重ねながら達成感を味わっていく子どもたちは、きっと学習への意欲を高めていくことになるでしょう。

- 子ども自らが課題を選択して家庭学習に取り組み、主体的に学ぶ習慣を身につけるノートに。
- 子どもが、言語活動の充実を図りながら、自らの思いや考えを表現できるノートに。
- 子どもたちが、励まし合ったり教え合ったりしながら、学級や学年のみんなで取り組むノートに。

このページで何を学習するかという題(テーマ)を書く。

学習した日時を書く。

全国学力・学習状況調査やジョイントプログラム、各種テスト等とも関連づける。(テストの事前・事後の学習)

簡条書きにし、見開きでまとめて、見やすいノートにする。文字は丁寧に美しく書く。(方眼ノートを活用する)

算数 12/17 割合 テスト勉強

習ったことよりの、教科書の問題をもう一度解こう。

まどめ 長方形を区切って、割合を表したグラフを書こうという。全体を円で表し、半ばで区切って割合を表したグラフと円グラフという。書こうや円グラフでは、全体と部分の割合、部分と部分の割合がよく分かります。

P.50 ① 全体→必ず100% 目もりを読みとって割合を求めよ。
 広島…51% 宮城…74 - 51 = 23 23% 計算が求める!
 岡山…83 - 74 = 9 9% 浜手…89 - 83 = 6 6%
 兵庫…92 - 89 = 3 3%

P.51 ③ %と%を割ることもできる。

① 兵庫 3% 広島 51% 51 ÷ 3 = 17
 ② 約 51% 23% 23 ÷ 51 = 0.45
 ③ 約 0.45 倍

まどめ クラフの書き方(かくときは、グラフの中に○%とかく)
 ① 各部分が全体の何%になるかを求める。
 ② 合計が100%にならないときは、ふつういさばん大きい部分をえて100%になるようにする。
 ③ 100等分した目もりのグラフ用紙を使って、各部分をそれぞれの百分率にあわせて区切る。
 ④ 書こうではふつう左から、また、円グラフではふつう真上から左まわりに百分率の大きい順に区切り、「その他」はいさばんにする。

P.53 教科書にやってみよう!(クラフをかこう!)

ただの「区切り」にせず、部分の各前・割合をかきこむ!

割合を使って
 P.54 ① 10%引で買います。何倍になるの考える。
 割合→割合もできる。
 15000 × 0.1 = 1500円 ⇒ 安すぎる?!
 (1-0.1)倍 15000 × (1-0.1) = 13500
 15000 × 0.1 = 1500円 ⇒ 安すぎる?!
 15000 × (1-0.1) = 13500
 A. 13500円

P.55 ③ 10%引き → さらに20%引き
 ① 200000 × (1-0.1-0.2) = 140000
 ② 200000 × (1-0.1) = 180000
 180000 × (1-0.2) = 144000
 ③ 結局何倍になったの考える。
 200000 × ((1-0.1) × (1-0.2)) = 144000
 200000 × 0.72 = 144000
 A. 144000円

ふりかえり
 もう一度問題を解いてみて、「割合」を足したり引いたり、また掛けたり割ったりすることができることがよく分かった。クラフが図では、「全体」と「部分」を考慮することが大切だ。

保護者からのアドバイス
 今日決めた時間に学習できたわ。よくがんばりました。明日もがんばれ!!

先生からのアドバイス
 大切な言葉を使って、かしよう書きでまとめることができていますね。
 ていねいに書くことができています。がんばりましたわ。

発展的な自主学習へ

- 問題づくりをする。
- 友だちのつくった問題を解く。
- 次の学習の予習をする。

学習の「ふりかえり」を書く。「わかったこと」「できるようになったこと」「次にどうすればよいか」等を書き、自分の学習の様子を捉える。

～ができる。
 ～がわかった。
 ～すると考えやすい。
 ～が疑問に思った。

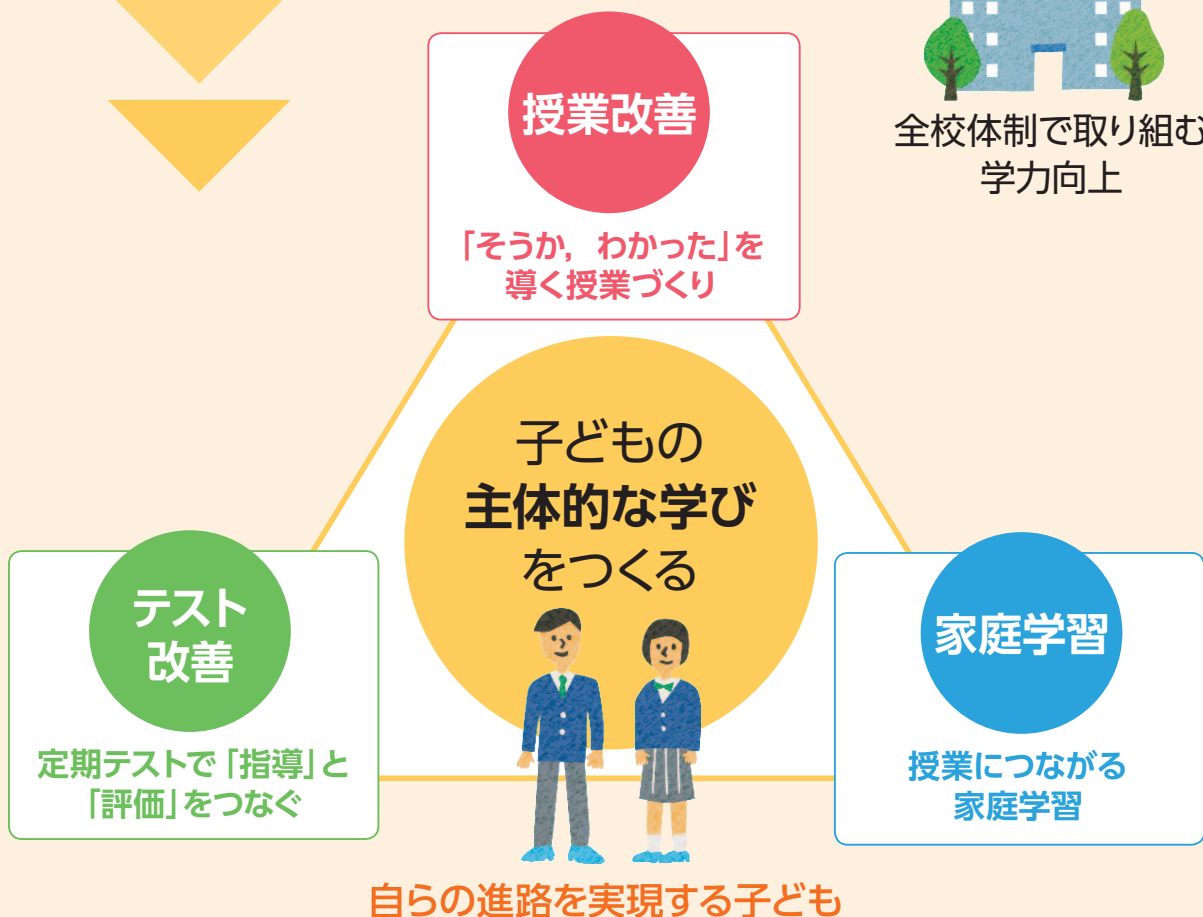
担任教師がチェックやコメントを入れる欄を設ける。教師は、次の指導を考える。

保護者がチェックやコメントを入れる欄を設ける。保護者にも励まし、見守ってもらう。

- 子どもたちが「自主学習ノート」に継続して取り組むには、学校で、その方法を指導することが大切です。ノートの書き方や課題の選び方、答え合わせの方法、さらには学習計画の立て方など、自主学習の定着から発展へと、段階的に丁寧な指導をしていかなければなりません。
- 子どもたちが「自主学習ノート」について交流し、よりよいノートづくりのための情報交換ができる場を設けます。



小学校での学習を更に発展させる
ことを意識して取り組みましょう



授業改善

「そうか、わかった」を導く授業づくり

これまでの日頃の授業は、もしかすると「やさしすぎる」ことはなかったでしょうか。教科によって異なるでしょうが、学習内容を細切れにし過ぎたり、やさしすぎる発問をしたり、一問一答に終始したり…生徒の側からすれば「そんなこと知っている」ということに授業が終始してしまっていることはないでしょうか。「このくらいだろう」という決めつけが先であれば絶対に生徒の力を伸ばすことはできませんし、同時に「よくわかる授業」というのは、「考えなくてもすぐにわかる」という意味ではありません。少し難しい課題に挑戦し、既習の知識や技能を駆使して「そうか、わかった、できるようになった」と導くのが「よくわかる授業」なのです。

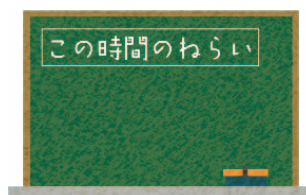
その際、小学校を含む下の学年で学んだことはもちろんのこと、他の教科で学んだことも活かして学びを深めたいものです。そのために、教科担任制の中学校では常に学年会や教科会との連携を大切に、他の教科の学びにもアンテナを張っておきましょう。

授業改善のポイントは

■ 授業の最初に学習のねらいを明示しよう

どの授業も当然ねらいがあって展開されているはずですが、言い換えれば、この1時間で生徒に「こんな力を付けよう」「こんなことができるようにさせよう」というものです。これをきちんと生徒に伝えずに授業をすることは、生徒の側から見ると、目的地も分からず連れ回されているようなものです。これからは授業の最初に「この時間のねらい(目標)」を明示してください。それによって生徒が学びのゴールを知ることになり、より深く学ぶことに通じます。また、同時にそれはいわゆる発達障害のある生徒の学びの集中にも通じます。

全国学力・学習状況調査の分析でも学習のねらいを明示した授業を重ねることが学力の定着に結びついていることが明らかになっています。



■ 必ず考える場面を作ろう

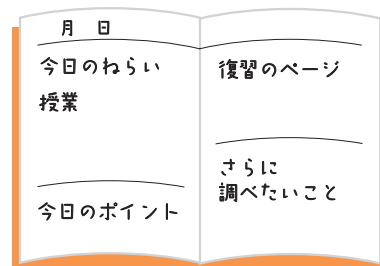
一問一答の授業ではなく、もっと生徒が考える場面を設定しましょう。生徒が一人で考える発問や、グループで話し合っ考える発問を工夫し、その考えやそう考えた理由を発表する場面を必ず作ってください。生徒が自分で考えたことを自分のことばで発表することは全ての教科で取り組むことができることですし、生涯にわたって大切な力です。これは言語活動の基軸ですし、教科の学習と生き方探究(キャリア)教育を結ぶものと言っても過言ではありません。



■ もっとノートを活用しよう

ワークシートを教材の中心にしている先生が多いですが、ポイントはその内容や構成です。語句や単語を入れるだけの穴埋めや計算問題ばかりで、「考えて書き込む」という場面が少ないことがないでしょうか。穴埋めプリントばかりしていると生徒は知らず知らずの間に「穴を埋めることが勉強」と思って、それ以上のことを考えようとしなくなりますし、考える必要もなくなるのです。

そこで、今一度ノートを見直しましょう。視写や聴写も学びの大切な手法ですし、「創るノート」づくりは大人になっても必要なスキルです。同時に「個に応じた学習」や「関心・意欲・態度」の観点のポイントはノートにあるのではないのでしょうか。



■ 学習の方法を指導しよう

授業では通常、学習の内容を教えています。より生徒の力を伸ばすためには自ら主体的に学ぶ力を身につけさせなければなりません。学習内容と同時に学習方法をしっかりと教えていく必要があります。先述のノート指導だけでなく、メモの取り方、調べ方、読図、発表の仕方…やや抽象的ですが「聞き方」もそうです。案外このようなことをおろそかにしてきたのではないのでしょうか。

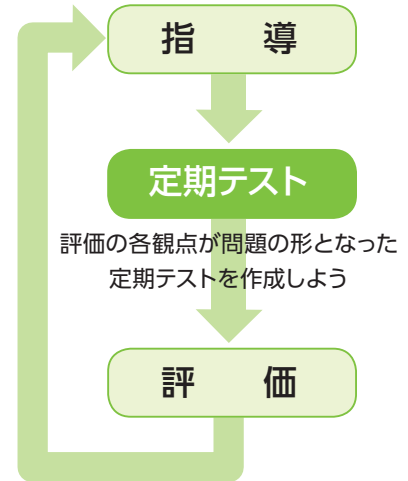
また、これらは個々の教員がその教科の特性に応じて指導しがちです。そのことは重要ですが、一方で各教科がバラバラで指導するとかえって生徒が混乱をすることもありますから、学年として、学校として指導すべき「学習方法」や「学習規律」を議論し、ある程度揃えることもまた重要です。

テスト改善

定期テストで「指導」と「評価」をつなぐ

■ テストの目的

「指導と評価の一体化」は今日では学びの大きな構造です。その「指導」と「評価」を繋ぐものが定期テストです。そのような中で、単に教科書や教材プリントに沿って、記憶していることを確かめるだけのテストを作っていませんか。指導計画に基づいて指導したことを見取るために、評価の各観点の問題の形になって並んでいるのが定期テストです。例えば数学の「身の回りの事象を、一次関数の表、式、グラフを用いて表現したり処理したりするとともに、変域などをとらえて表わすことができる」という評価規準を問題の形でテストに表わさなければならぬのです。



ところで、一般に生徒は記号で答える問いはやさしく、記述式は難しいという先入観をもっています。この概念は教師も持ちがちですが、変えたいものです。選択式の問題でも思考を問う問題はあります。また記述式の問いを入れることにより暗記から解放されて、学習から逃避していた生徒であっても前向きにテストに臨みはじめたという事例もあります。記述式の問いは「採点が面倒だ」「採点基準があいまいになりがちだ」ということで敬遠をする教師がいますが、これは全て教師側の理屈に過ぎません。同教科の先生と意見交流しながらチームで臨みたいものです。

■ 範囲と内容

テストの範囲が〇〇ページから〇〇ページと単元の途中でプツンと切れているようでは、「指導と評価」の観点からは疑問を持たざるをえません。学習のまとまりや単元全体を構造化し、先述の評価規準に照らして問題を作成しなければなりません。すなわち、この単元（題材）や学習のまとまりではどんな力を付けたいのか、そのために定着の度合いをテストではどのように見取るのかを考えて行くと、自ずと短答式の問い、記述式の問いが出来上がっていくはずで



ところで、授業で教えたこと以外はテストに出題してはいけなないと考えていませんか？
もちろん「授業で教えた」という部分のとらえ方から議論しなければなりません、少なくとも教えたことそのまましか出題しないのであれば単なる定着確認テストに過ぎません。生徒の様々な既習事項、場合によっては他の教科で身に付けたスキルも活かした問題を考えてみてください。生徒が身に付けている様々な力（少なくとも複数の力）を結集して解いていかなければならないテストを期待します。その見本のひとつが、全国学力・学習状況調査の問題ではないでしょうか。
また、テストの問い方に課題があることもあります。何を問うのか、考えさせるのかの前に生徒を迷わせていることはありませんか。

■ 結果の分析と活用

定期テストに限らず、テストの役割は成績を出すためだけのものではありません。生徒の学習の定着の度合いを見ることも大きな役割です。通過率の低い問題、すなわちあまり生徒に定着していない問題は、指導者がその要因を分析してそれまでの指導を見直し、生徒にももう一度指導する必要があります。いわゆる「テスト返し」はそのための時間です。「今回、一番出来が悪かった問題をもう一度説明するのでみんなで見よう」という取組です。学習確認プログラム等で学年の中で相対的に高い通過率を確保している先生は、このことがしっかりできている先生であることは聞き取り調査等で明確になってきています。従前、よく見られた「テスト返し」における「答え合わせ」は、正答表を配布するなどして簡略化し、真に学力の定着を図る取組を実践してください。



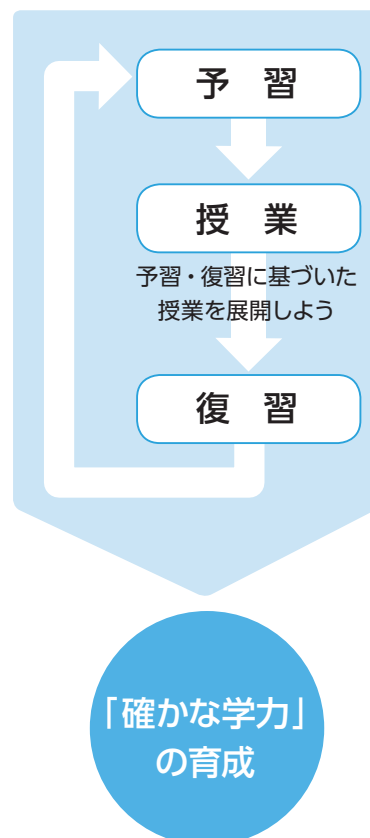
家庭学習

授業につながる家庭学習を

家庭学習の質と量が学力の定着を左右することは明らかです。中学校では教科担任制のため、どの先生がどの学級でどれだけ家庭学習の課題を出しているのか把握しにくいですが、まだまだ工夫はできるはずです。

家庭学習といえば「課題プリント」という印象がありますが、予習や復習をしっかりやらせることこそ、家庭学習の基軸です。予習や復習をしなくても、あるいは予習や復習とは関係なしに授業が展開されていないでしょうか。年度当初の授業ガイダンスで、自身の授業の予習や復習の意義と方法をしっかりと指導し、その予習・復習に基づいた授業を展開してください。毎時の予習や復習が家庭で定着すればこれだけで相当な家庭学習になるはずです。

さらに、先生が指示するのではなく、いわゆる「自由勉強帳」方式で生徒に主体的に家庭学習に取り組ませることも大切です。授業に関わる内容をさらに調べて深めたり、問題づくりの形で復習を重ね、テスト前にそれを解くことで成果をあげているなどの例もあります。



小中一貫教育と学力向上



子どもたちに確かな学力を培うために、小中学校それぞれでの授業改善や家庭学習などのポイントをまとめてきましたが、児童・生徒一人一人のキャリア発達を見据え、それらを義務教育9年間にわたる取組として位置づけ、実践することが重要です。

本市では平成23年度から、全市で小中一貫教育を展開しています。これは開晴小中学校や凌風小中学校のような施設一体型の学校だけではなく、全ての小中学校で、中学校ブロックごとにそれぞれ独立した小学校・中学校を結んで小中一貫教育を展開しようというものです。目的はもちろんすべての子ども達の力を、義務教育の9年間でさらに伸ばすことです。

いうまでもなく、子どもたちは小学校1年生から中学校3年生まで、毎年の学習を積み上げて成長していきます。しかし、指導者側に目を転じると、例えば小学校低学年の先生は中学校での学習や子どもたちの15歳の姿を意識して日々教えているのでしょうか。また、中学校の先生は小学校の何年生で何を学んで(つまりいて)今があるのかを考えたことがあるのでしょうか。小中一貫教育はこの「途絶え」を打破することがポイントです。

それでは中学校ブロックで実践的に取り組めることにはどのようなことがあるのでしょうか。いくつか例をあげてみましょう。

夏の小中合同研修会を有効に活用する

小中一貫教育を進めるためには、学力の実態をまず真ん中において、小学校と中学校の先生が議論することから始めましょう。夏の小中合同研修会はその絶好の機会です。この間の取組で、さまざまな話題で議論し交流できるようになってきました。具体的に話が進むほどA小とC中、B小とC中間の個別の課題が見えてきますが、ここで大切なことはC中ブロックで共通の課題、すなわちA小・B小に共通となる課題を見出し、C中と共にその課題克服に努めることです。

中学校ブロックで統一した「家庭学習の手引」の作成

各校、家庭学習の充実には力を入れています。推奨する学習時間ひとつをとっても、それぞれの学校がバラバラであるのが現状です。「6年生になったら毎日1時間は勉強しましょう」と指導された子どもが、中学校に進学したら「中学1年生は30分は机に向かいましょう」ということが現実にあるようです。これでは子どもや保護者が混乱するだけです。地域の実態を踏まえた「9年間の家庭教育の手引」が作成され、小中学校の共通認識のもとで有効に活用できれば効果的です。

小中一貫したカリキュラムの整理

例えば、小学校1年生の算数から中学校3年生の数学まで、どのようにカリキュラムはつながっているのでしょうか。小中の教員でチームを組んで俯瞰的に点検してみましょう。そのつながりや関連性が見えた時に授業のあり方や教材開発、補充教材の作成に役立つものがわかってくるはずです。

教材や作品の交換等

中学校の教員が、小学校のある教科の専科指導に定期的に赴くことが理想ではありますが、現実には厳しいです。そこでまず、年に数回小中相互に授業を見学したり、時には指導をしたり、教材や児童生徒の作品を交換してみてもどうでしょう。実際、どんな教材で学習しているのかその感覚をつかむことも大切です。また、児童生徒の作品を交換し、場合によってはそれを展示することで、例えば「中学生になればこんな作品を作るのだ」と小学生に見せるだけでも学習意欲を喚起することに通じるのではないのでしょうか。

つきたい力を明確にした「言語活動」

日々の授業の中で、各教科等の目標実現のために、思考力・判断力・表現力等を駆使・伸長させることができるよう発問・課題の提示等を工夫することにより、発達段階に応じた記録・要約・説明・論述・発表・討論等、言語活動を充実させましょう。

日々の授業での言語活動の充実と関連付けて、プレゼンテーション、ポスターセッション、ビブリオバトル（知的書評合戦）などの言語活動を、系統的に、学校行事等も含めた年間計画に位置付けることが重要です。



例えば

1

ポスター発表を通して 調べ学習から探究活動へ

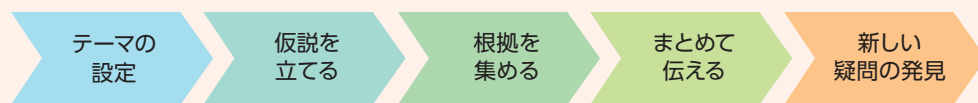
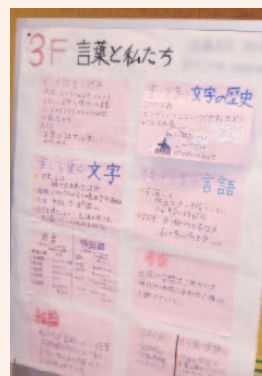
調べ学習と探究活動の違い

調べ学習は、自分が知りたいと思ったことに対して、書籍やインターネット等を利用して答えを見つけることです。

それに対して、探究活動は、さまざまな観点から物事を考え課題を発見し、複数の方法を考えだしたり検討したりすることで答えを導き出します。具体的な手法にポスター発表があります。

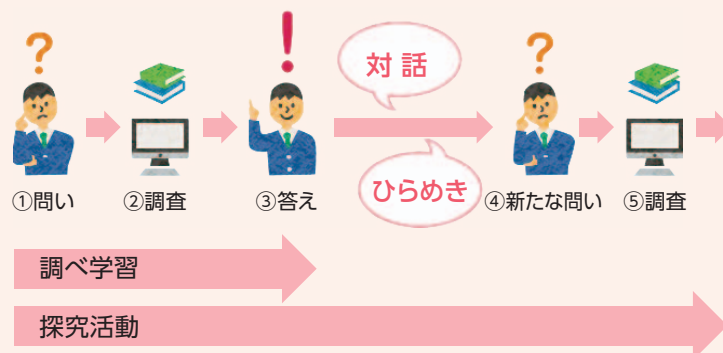
ポスター発表とは？

ポスター形式の発表をすることによって、発表者と聴衆によって作られる話し合い（議論）の場です。自分の考えをまとめた紙（これをポスターと呼ぶ）をもとに発表を行い、聴衆との質疑応答を通じて、考えを深めていく発表形態です。



調べ学習から探究活動へ

まずは、調べ学習に取り組み、自らの力でわからなかったことをわかるようになったことに成就感を持たせます。その後、習熟に応じて探究活動へと質を深めていくことで、社会の変化や科学技術の進展等に対応可能な「生きる力」を育成していきましょう。



もっと詳しく知りたいときは⇒冊子「探究教室」（発行：京都市立堀川高等学校）
光京都イントラ > 各課のページ > 学校指導課 > SSH 事業

例えば

2


学校図書館を活用して

学校図書館を自ら学ぶ【学習情報センター】として、豊かな感性や情操を育む【読書センター】として活性化させ、計画的に利用しましょう。

小学校では

読書習慣を身につけさせましょう。

学校図書館を活用し、「つきたい力を明確にした言語活動の充実」を図る授業を行いましょう。

<p>読書ノートの活用</p> 	<p>「めざせ 100 冊! 読書マラソン運動」での活用のみならず、低・中・高学年の発達段階に合わせて、学校図書館のオリエンテーションに始まり、目次・索引の使い方・本の分類・辞典の使い方・カードの書き方・資料リストの作り方・おすすめの本紹介など、授業でも活用できる内容です。校内で計画的に活用しましょう。</p>
<p>読書環境の整備</p>	<p>いつでも使える図書館・いつも身近に本がある教室を目指しましょう。 担任の先生の読書活動への熱意こそが一番の読書環境です。もちろん学校図書館運営支援員(学校司書)との連携は欠かせません。読みたくなる本の紹介や読み聞かせなどいろいろな工夫ができます。</p>
<p>読み聞かせ 読書ピクニック</p>	<p>担任や学校図書館運営支援員、読書ボランティアによる本の読み聞かせや読書ピクニックで、子どもたちに本に興味を持たせ、読書習慣につなげましょう。</p>
<p>各教科の中で</p>	<p>「学校図書館の活用を通してつきたい力の系統表」(研究課 HP「平成 25 年度研究の成果物」に掲載)を参考に! 「知る」→「つかむ」→「集める」→「選ぶ」→「まとめる」→「伝える」→「ふりかえる」学びの過程で【つきたい力】を具体的に示しています。</p>

中学校では

学校図書館を活用し、「つきたい力を明確にした言語活動の充実」を図る授業を行いましょう。

◆ 図書活用ノートに記録を残しましょう。

<p>各教科の中で</p>	<p>授業改善を目指して、各校に配布している学校図書館を活用した授業の指導案集を参考に、自校の図書主任や学校図書館運営支援員(学校司書)と相談し、図書資料を収集し活用します。その際、京都市図書館の団体貸出も利用できます。 調べたり話し合った後は、必ず発表の機会を設けましょう。 ⚠ 最寄りの京都市図書館に、必要な本を1週間前に申し込むと、関連本を1ヵ月間貸出する制度があります。</p>
<p>ビブリオバトル (知的書評合戦)</p>	<p>生徒が自分で読んだ本を、友達に紹介(時間は3分~5分)し、その後、質疑応答の時間を設けます。1グループ(5人まで)全員の発表後、一番読みたい本(チャンプ本)を投票で決めます。</p>
<p>ブックトーク</p>	<p>テーマを設けて、それに関連した本を紹介します。生徒がグループで行うのもよいし、学校図書館運営支援員に依頼することもできます。また、最寄りの京都市図書館司書に実施依頼もできます。 テーマ例: 仕事・友情・怖い話等、発達年齢に応じたもの</p>
<p>読み聞かせ</p>	<p>①絵本を幼児・小学校低学年に読み聞かせるための手法を学びます。学校図書館運営支援員や最寄りの京都市図書館司書に依頼もできます。 ②生徒を対象に、学校図書館運営支援員や京都市図書館司書による本の読み聞かせを行います。</p>

子どもに何を教えるかではなく『子どもがどのように学ぶか』が重要です!



平成 27 年 3 月

発行：京都市教育委員会指導部 学校指導課